

『絵でわかる植物の世界』第1～10刷正誤表
(2020年12月現在)

このたびは、標記書籍をお買い求めいただき誠にありがとうございました。
標記書籍に誤りがありました。訂正し、深くお詫び申し上げます。

頁数	位置	誤	正
132	4.3.4 1～2段落	<p>DNAの塩基配列の分析によって植物の系統を調べる研究が1980年代からはじまり、1990年代に系統樹があいついで発表されました。多くの場合、これまで推定されてきたことを裏づける結果となっていますが、なかにはこれまでの定説を覆しそうな結果も得られています。こうした結果を踏まえて、少しでも正確な分類体系をつくろうと、世界中の研究者たちが努力を続けています。</p> <p>DNAによる系統解析では、ある特定のタンパク質(光合成で働く酵素ルビスコなど)の遺伝子や特定の遺伝子間領域に注目して、DNAの塩基配列を近縁な種の間で比較し、進化の過程で塩基の置換がどのように起きたかを解析して、その系統関係を分岐図として示します。図4.2に、被子植物全体の分岐図を簡単にしたものを示しました。図中の「？」をつけたところは、DNA解析では分岐した順番がわからず、多分岐になってしまうところです。</p>	<p>DNAの塩基配列の分析によって植物の系統を調べる研究が1980年代からはじまり、1990年代以降、系統樹があいついで発表されました。DNAによる系統解析結果をもとに作られた分類体系はAPG (Angiosperm Phylogeny Group) 体系と呼ばれています。多くの場合、これまで推定されてきたことを裏づける結果となっていますが、なかにはこれまでの定説を覆す結果も得られています。こうした結果を踏まえて、少しでも正確な分類体系をつくろうと、世界中の研究者たちが努力を続けています。</p> <p>DNAによる系統解析では、ある特定のタンパク質(光合成で働く酵素ルビスコなど)の遺伝子や特定の遺伝子間領域に注目して、DNAの塩基配列を近縁な種の間で比較し、進化の過程で塩基の置換がどのように起きたかを解析して、その系統関係を分岐図として示します。図4.2に、被子植物全体の分岐図を簡単にしたものを示しました。DNA解析によって系統的なまとまりがわかっても、分岐した枝の信頼性が低い場合や分岐した順番がわからず多分岐になってしまうところもあります。</p>
133	図4.2		下図に差し替え
134	4.4.2 3行目	87属 2300種	100属 2200種
136	5行目		「アカザ科、」を削除
137	4.4.3 1行目	58属 3000種	62属 2500種
138	4.4.4		「？」を削除

	見出し		
	4.4.4 4行目	7属 160種	2属 200種
	4.4.4 下から3行目	モクレン属を中心としていくつかの属がありますが、これら周辺の属とモクレン属との境界はあまりはつきりしません。	モクレン属を中心としていくつかの属がみとめられてきましたが、これら周辺の属とモクレン属との境界はあまりはつきりせず、一つにまとめられました。
140	4.4.5 2行目	365属 3200種	341属 4000種
142	4.4.6 1行目	95属	92属
	4.4.7 1行目	642属 18000種	766属 20000種
145	7行目	マメ科の中でも祖先的と考えられる	マメ科の中でも祖先的と考えられてきた
	19行目	1200種	1000種以上
	4.4.8 1行目	3500種	3800種
147	5行目	252属 6700種	236属 7300種
	4段落以降	<p>ゴマノハグサ科の植物としては、キンギョソウやビロードモウズイカ、オオイヌノフグリやクワガタソウがあります。269属 5100種ほどが、世界の温暖な地域に分布します。</p> <p>両科とも、本来は五数性の花で、雄ずいは5本あります。左右相称性の発達と関係して、種によっては雄ずいは退化して数が減少する傾向にあります。図4.11に示したように、×印のところは雄ずいが退化して、場合により仮雄ずいと呼ばれる突起になっています。このような雄ずいの退化傾向も、これらの科の特徴の一つです。</p>	<p>両科とも、本来は五数性の花で、雄ずいは5本あります。左右相称性の発達と関係して、種によっては雄ずいは退化して数が減少する傾向にあります。図4.11に示したように、×印のところは雄ずいが退化して、場合により仮雄ずいと呼ばれる突起になっています。このような雄ずいの退化傾向も、これらの科の特徴の一つです。</p> <p>従来のゴマノハグサ科は世界の温暖な地域に分布する大きな科でした。APG体系ではビロードモウズイカはゴマノハグサ科(59属 1800種)に残り、キンギョソウやオオイヌノフグリ、クワガタソウはオオバコ科(90属 1900種)に、半寄生性のシオガマギクは以前から関連性が深いと考えられていた寄生性のハマウツボ科(99属 2100種)に移されました。</p>
148	4.4.10 2行目	1528属 23000種	1620属 25000種

	4.4.11 見出し	解体寸前？	解体された
	4.4.11 1行目	広義のユリ科は、世界に288属5000種ほどが広く分布しています。	かつてユリ科は、世界に広く分布し、288属5000種ほどの大きな科でした。
150	4.4.11 4段落	そして、近年のDNAの解析からは、従来から別科とされることの多かったヤマノイモ科のほか、リュウゼツラン科、アスパラガス科、ネギ科、サルトリイバラ科、アルストロメリア科、キスゲ科、ツルボラン科、ヒアシンス科など、系統的に多数の科に分けたほうが自然だという結果も出ています。その場合、狭義のユリ科は、カロコロツス属やユリ属、バイモ属、チューリップ属など、東アジアと北アメリカに分布する16属600種あまりの小さな科となりそうです。	APG体系のユリ科は、東アジアと北アメリカに分布する15属600種余りの小さな科となり、ホトトギス、ユリ、バイモ、チューリップが含まれています。ユリ科から外れたものは、ヤマノイモ科、シュロソウ科、イヌサフラン科、ユリズイセン（アルストロメリア）科、サルトリイバラ科、ススキノキ科（ワスレグサを含む）、ヒガンバナ科（ネギを含む）、クサスギカズラ科（アスパラガス、リュウゼツラン、ギボウシを含む）などになります。
152	4.4.12 1行目	668属9500種	700属11300種
154	2行目	105属2500種	144属3600種

図 4.2 DNA 解析に基づく被子植物の系統関係

